

主の昇天

2009.5.24

マルコ 16; 15-20

今日は主の昇天の祝日です。昔風に言えば、御昇天の大祝日です。今日の第一朗読の使徒たちの宣教の記述に従って、教会は復活祭後の四十日目にこの祝日を祝ってきました。復活祭から四十日目は木曜日にあっており、この日は守るべき大祝日ということになっておりました。守るべき大祝日とは、この日は日曜日と同じように、ミサに与ることが信者にとっては義務とされていたということです。その後、典礼暦の刷新によってこの大祝日は今のように、復活祭後四十日目の次の主日、今年は今日の日曜日に祝われることになりました。ちなみに、来週の日曜日は聖霊降臨の大祝日ですが、この祝日も使徒たちの宣教の記事にあるように、使徒たちの上に聖霊が下るといふ聖霊降臨の出来事が起こったのは、ユダヤの人々の過ぎ越しの祭り、私たちキリスト教の信者にとっては主の復活祭から五十日目のユダヤの人々の五十日祭、ペンテコステの祭りの日で、この日は必ず日曜日に当たっていました。

このようなことを述べたのは、今日の主の昇天の祝日が、教会の一年の典礼暦の中で主の復活祭を起点とした大切な祝日であり、教会の信者である私たちの信仰にとっても、今日の祝日において祝われる、復活の信仰と結ばれた大切な信仰内容を心の内に新たに喚起し、この祝日のミサを通して特別な思いをこめて、その信仰を表明すべき祝日だからです。

今日の主日に私たちが祝う、私たちの信仰内容は、今日のミサの中で聞いた三つの朗読の中に表明されています。その第一は、言うまでもなく、今や復活のいのちのうちにある私たちの主イエス・キリストは、天に昇って御父なる神の右の座につかれていますということです。天とは、この地上の生を生きる私たちが様々な思いをこめて見上げる場です。そこには、全てのものの創造主である、父なる神がいてくださり、そして今や、私たちが信じる私たちの主イエス・キリストがその父なる神と等しい力を持つお方としていてくださるのです。そしてその天の彼方は、主イエス・キリストが父なる神とともにそこにおられることによって、私たちが生きるこの地上と結ばれているのです。私たちの地上の生活の全ては、地が天に包まれ、天の下にあるように、父なる神と私たちの主イエス・キリストの愛の支配に包まれ、その下におかれているのです。

今日の聖書のみことばが私たちに告げていることはそれだけでありません。今日の祝日に私たちが宣言する第二のことは、天の御父のもとに上られた主イ

イエス・キリストは、私たちから遠い、天の彼方に行ってしまったのではない、私たちの実生活とは縁遠い方になってしまったのではないということです。

弟子たちのもとから御父のもとへ行かれる主は、聖霊を約束し、聖霊が来られるのを待ち望むよう弟子たちに指示されます。

わたしたちが信じるキリスト教の信仰内容の中でも、聖霊は私たちにとって最も理解しにくいと思われるかもしれません。しかし、私たちの信仰にとって聖霊への信仰は、イエス・キリストへの信仰と全く同じように、必須の信仰内容です。聖霊は私たちの信仰の源泉であり、原動力です。「聖霊によらなければ、誰もイエスを主とは言えない」と後に使徒パウロは述べています。福音書が描く弟子たちの姿は、イエスの語ることばを理解することが出来ず、最後までイエスの周りを右往左往しています。そして最後の最後には、イエスを十字架の上に見捨てて、逃げ去ってしまいます。復活された主イエスを目の前にしても、彼らは依然として、信じきれないままです。そのような弟子たちをいのちをかけた信仰の証人、主の十字架の後に従う殉教者としたのは、御父のもとに上られた主イエス・キリストが御父とともに、弟子たちの上に遣わされた聖霊の働きによるものです。聖霊に促されて、弟子たちは世界中に行って、主イエス・キリストの福音を告げる使徒とされたのです。使徒たちから始まるこの教会の福音宣教の働きは、二千年の歴史を貫いて私たちのもとにまで届けられ、この時代、この地に住む私たちまでもがイエス・キリストを主と信じることを可能にさせたのです。そればかりではなく、最初の弟子たちの上に下った聖霊は、私たちの人生を教会へと導き、教会と出会った私たちの心を開いて、聖書に語られている最初の信者たちと同じ、罪の赦しのための洗礼の恵みに与るものとしてくださったのです。今日も私たちはこうして主の祭壇を囲んでいます。この私たちの中に主イエス・キリストを現存させてくださるのも、聖霊の働きです。聖霊こそが、今私たちとともに生きてくださる主イエス・キリストのお姿なのです。この全ての発端は今日私たちが祝う、主の昇天によって可能となったのです。

主の昇天の信仰が私たちにもたらす第三の信仰内容は、天の御父のもの行かれた主イエス・キリストはいつか再び、私たちのこの世界にお出でになられるということです。そのとき、私たちが現実と呼んでいるこの世界の有様は、ページをめくるように過去のものとされ、最終的、決定的に、主イエスの語られたことの全てこそが真実であることが、この世界において明らかされるということです。

最後に、今日の聖書の箇所には直接には出ていませんが、昇天の信仰の第四の内容は、主のみ跡を慕い、そのみ跡に従う者たちは、主の行かれた道を自分

の道とするということです。主イエスが十字架の苦しみと死を経て、墓に葬られ、死者のうちから復活し、天に昇って全能の父なる神とともにおられるように、主に従う私たちの最終目的地も、この地上にではなく天に定めるべきであるということです。

以上述べたことの全ては、聖書において語られ、教会においてわたしたちがそれを祝う、私たちのキリスト教の信仰が伝える信仰によるビジョンということが出来ます。キリスト教における信仰あるいは信仰者とは、キリスト教において信じられてきたこのようなキリスト教の信仰のビジョンを、私たちが生きる現実の生活と社会の中で、自分のビジョンとして保持し続け、それによってこの現実に対え、この現実を生きる自分たち自身の生き方を変革してゆこうと希望し続ける者であるということです。聖霊降臨の祝日を前に、その入り口をなす今日の主の昇天の祝日のミサの中で、私たち一人ひとりがそのような力強い信仰のビジョンの担い手となることが出来るようとも祈りあいたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高